

第27回 「ことば」フォーラム

伝え合いの言葉
ーコミュニケーションの意味ー

2006年9月14日（日）

北海道大学学術交流会館

熊谷 智子（国立国語研究所）
柳町 智治（北海道大学留学生センター）
岡本 能里子（東京国際大学）
杉戸 清樹（国立国語研究所）
小林 ミナ（北海道大学留学生センター）

共催：北海道大学留学生センター

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（野山 広） それでは、時間となりましたので、第27回「ことば」フォーラムを始めたいと思います。今日のテーマは「伝え合いの言葉ーコミュニケーションの意味ー」です。独立行政法人国立国語研究所と北海道大学留学生センターの共催ということで開催いたします。1時半から4時半までの3時間、少し長い時間ですけれども、お付き合いください。連休の合間のこの日にここまで足をお運びいただいて、まずは本当にありがとうございます。午後のひととき、ぜひ、「伝え合い」あるいは「コミュニケーション」ということについて一緒に考えることができればありがたいと思います。では、まず最初に国立国語研究所所長の杉戸より御挨拶^{あいさつ}申し上げます。

杉戸 紹介がありました国立国語研究所の所長を務めております杉戸清樹と申します。幸い雨は上がりました。しかし、お忙しい中、お休みの中、ようこそお出掛けくださいました。本当にありがとうございます。今日の会、上の看板にも27回となっております。私ども国立国語研究所では、5年ほど前から、毎年5回、この「ことば」フォーラムという催しを続けて開いてきております。全国各地で開かせていただきますが、北海道へ伺うのは今回が初めてでございます。この「ことば」フォーラムという催しですが、言葉の研究、あるいは言葉の教育の専門家の方々だけではなくて、一般の市民の皆様方にも向けて、言葉、国語についての話題を選び、そして、国語研究所の研究の成果、あるいはそのときどきの言葉の話題を選びまして、講演、あるいはシンポジウムというかたちで開いてきているものであります。「フォーラム」という外来語を使っておりますけれども、一つの意味としては、「広場」、みんなが集まる場所という意味がある言葉です。文字通り、いろいろな立場の方々にお集まりいただき、御参加いただき、言葉をめぐって話し合っていただく機会を設けたい、そんな趣旨で続けてきているものであります。本日は「伝え合いの言葉」というテーマで企画しました。詳しい内容はのちほど司会のものから説明いたしますけれども、言葉というものの最も基本的な働きである伝え合い、コミュニケーションということがらを、いわば言葉の原点に立ち返って考える機会、そんなことを目指した企画でございます。今日のために、すでにプログラムでご覧のとおり、国語研究所のほか、外から、東京国際大学の岡本先生、それから、共催していただいております北海道大学の留学生センターの柳町先生、小林先生がお話や討論に参加してまいります。先生方、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。それから、国語研究所から熊谷、司会の野山、そして、私も討論に参加いたします。ど

うぞよろしく願いいたします。繰り返しますけれども、夕方までの約3時間の間、限られた時間でありますけれども、御参加の皆様方がそれぞれのお立場で、何か一つでも二つでもおみやげになるものを持ち帰っていただくことができれば幸いだと願っております。のちほど御質問、あるいは御意見をお受けする時間も設けておりますので、どうぞお気軽に、そして、率直なお言葉を出していただけるようお願いいたします。簡単ですけれども、御挨拶といたします。どうぞよろしく願いいたします。

司会 それでは、本番に入る前に、今日のフォーラムの趣旨について御説明申し上げます。皆さんのお手元に、ひょっとしたらチラシとか、あるいは「北海道新聞」の記事とかがある方は、ある程度このフォーラムの内容がお分かりかと思います。「伝え合いの言葉」、あるいは「コミュニケーションの意味」というテーマにあるように、伝え合いというのは1人というよりは、人と人が二人以上集まって、よりよく理解し合ったり、共に生きていくために語り合ったりすることを総称して「コミュニケーション」というふうにいるわけですね。このコミュニケーションのあり方について、一体どういう構造になっているか、何が重要なのだろうかというようなことを一緒に考える場を、フォーラムとして今日提供できれば幸いです。国立国語研究所では、新「ことば」シリーズという本を出しているのですが、実際はこういうものです。外に刊行物が置いてありますが、実際これも展示してあって、後ほど御覧になっていただければと思います。今年発行された新「ことば」シリーズ 18 はこの「伝え合いの言葉」がテーマでありました。ここで述べられていることを踏まえて、今日の催しを企画・運営していきたいということで考えてみた次第です。これから話をしてもらおう予定の熊谷研究員は、国立国語研究所の研究開発部門というところに所属していますが、専門分野は社会言語学です。例えば、3人以上の人が集まったときにどのようなコミュニケーションをとっているか、それを記述して、実際にどのような内容で、どういう構造になっているかということを分析しています。そういった研究をすることが熊谷さんの仕事のひとつとなっています。そういう専門性を生かした上で、実は先ほどの新「ことば」シリーズの今回の号の編集のまとめ役をやっていたのが熊谷さんです。その本の内容を踏まえながら、今日皆さんに冒頭の話をしていただくということで、この話が基調になります。今日の基盤というか、根っこになりますので、しっかりと聞いていただいて、次の話へ展開できればと思います。今日のお話の順番ですが、1時40分ぐらいから熊谷さんの話が始まりまして、約20分ぐらいずつ3人の話が展開される予定です。約1時間後に約30分の休憩時間をとる予定です。30

分の休憩時間というのは北海道ではとても重要だと聞きました。夕方終わったあと、遠いところから来ている方が多いこともあって、懇親の会を開くような時間がなかなか難しいということでした。ぜひインターミッションというか、中休みを長く取ってもらいたいという北海道大学の方々の要望もありまして、30分とってあります。お茶を飲みながら、あるいは実際に発表した者も、中に入ってお話をしたいと言っておりますので、ぜひ語り合っていて、後半のパネルへ移行したいと思っています。中休みにいただいた質問に答える時間を最初に約20分ほどとりまして、そのあと、二人のコメンテーターのコメントをいただいた上で、ディスカッションを行います。最終的には、ディスカッションのあと、まとめに入り、4時半ごろの終了を目指しています。皆さんの御協力、よろしくお願いしたいと思います。申し遅れましたが、私は司会と途中の質疑応答の整理等々の役を担当します野山と申します。よろしくお願いします。それでは、熊谷さん、よろしくお願いします。

「言葉で人とのかかわり合う」熊谷 智子 (配布資料：熊谷 p. 1～4)

熊谷 国立国語研究所の熊谷でございます。どうぞよろしくお願いいたします。今日は言葉で人とのかかわり合うということでお話しさせていただこうと思います。実は、はじめに申し上げようと思っていたことが、いま趣旨説明のところではほとんど紹介されてしまったのですけれども、先ほども御覧いただきました、この本（新「ことば」シリーズ18）について、実はこれは人が言葉で伝え合うということについて、座談会とか、解説とか、問答といったいろいろな形で、いろいろな人が自分の専門を生かしながら説明を加えるという本になっておりますけれども、そこでちょっと私も短い解説を書きました。その内容を基にしながら、お話しいたします。私たちは朝起きてから夜寝るまで、人と話をしたり、新聞やテレビ、あるいは最近はインターネットなどからも情報を取ったりというかたちで、言葉を話したり、聞いたり、書いたり、読んだりといった活動を行いながら、毎日の生活を送っております。今日のお話の中では、そうした活動の中から、特に人と言葉でやりとりをするというところに注目しながら、言葉でコミュニケーションをすることによって、私たちはどういうふうにと人とのかかわり合っているのか、それから、より良いかかわり合いということを考えていく上で、どんなことに目をつけていったらいいのか。そう簡単に答えが出るようなことではないのですけれども、そういったことをこの3時間の中で御一緒に考えていくための話題をいくつか出せばと思ってお

ります。まず最初に、人がコミュニケーションをするときに、言葉でどんなことをしているのかということ、いくつか確認してみたいと思います。人に何かを伝えるということは、情報を相手に渡す、受け渡しをするということが一つあると思います。それはたとえば、「明日の会議は3時に始まりますよ」という事実を伝達するというものであったり、「今日私は皆さんにここで目にかかれて本当にうれしいです」という気持ちを表出するというようなことであったり、何かを人に聞いてもらう、情報を受け取ってもらうというようなことがあります。それから、二つ目として、人を動かすということがあるかと思っています。たとえば、人に何か頼みごとをしたり、指示を出したりして、相手の行動を促す、あるいは何か説得することで相手の考え方をちょっと変えてもらおうと思う。そういうかたちで何か人に影響を与えようとする。それも言葉の働きの一つだと思います。そして、もう一つ、とても重要なこととして、人との関係をつくったり、その関係を維持していきなりするという働きが言葉にはあると思うのです。たとえば、初対面の相手に自己紹介をするとか、「よろしくお願いします」と挨拶をする、そういうことが最たる例ですが、たとえば、よく知っている人同士でも、近所の人と道で会って立ち話をするというようなことがありますよね。「雨が続きますね」と言うと、「そうですね、うっとうしいですね」という。その程度のやりとり。それはたとえば、情報のやりとりとしてはべつにどうということはないのですが、そこでただ行き違ってしまうだけで、言葉を交わすこと自体に意味がある。そのことによってお互いの関係を確認したり、よりいいものにしていきたいという気持ちを確認したりということがあると思います。こうしたいろいろな働きかけの種類があって、こうしたことをお互いにしながら、社会生活というのは営まれていくのではないかと思います。次に、こうした、頼みごとをしたり、挨拶をしたり、いろいろなことをしながら暮らしている中にも、実はそう簡単に済むことばかりではなくて、ちょっとした工夫が必要な場合もあります。たとえば、頼みごとをするということを考えていただくと、頼みごとをするときというのは、相手にこのことをしてもらいたいと思うので、なんとかうんと言ってもらいたい、引き受けてほしいという気持ちがあります。それが先に立ちすぎて、「とにかくお願い、お願い」と押し手の一手で言ってしまうと、今度は相手のほうが、「自分の都合ばかり言っている」と気分を害してしまう可能性がある。機嫌を損ねてしまうと、言うことを聞いてもらえませんか、元も子もなくなってしまうというようなことがあります。それで、どうするかというと、「ほんとに忙しいときにお手間をかけて申し訳ないんだけど」という恐縮の

気持ちを言ってみたり、あとは、「自分でできたらほんとによかったんだけども、ちょっとこういう事情でどうしてもできなくて」と、なぜあなたにお願いしなければいけないかということを理解してもらおう。そういういろいろな手を尽くしながら、私たちは無意識のうちに人に働きかけをしているのではないかと思います。そのほかにも、人に苦情を言ったり、誰かに注意をしたりというようなときには、そこで言おうとしていることは相手にとっては耳に快くないと言いますか、あまり気分の良くないことを言わなくてはいけない。そういうときにもやはり相手の気持ちに配慮しながら、言い方に気をつけるということが出てきます。ただ、難しいのは、あまりにそこに気をつけすぎて遠慮ばかりしていると、苦情を言っているつもりなのに相手が苦情を言われていることに気がつかないとか、はっきり言いたいことが伝わらない。それも困ります。ですから、大事なことは、両方のバランスを取るということです。このことをしようと思った、その目的もできるだけ効果的に果たそう。それと、あとは相手の気持ちとか、お互いの人間関係を大切にしよう。その二つのことをどううまくバランスを取りながら言うか。言葉だけではたぶんないと思うのです。実際の毎日の生活を振り返ってみても、言葉で、かたちの上で何を言うというだけではなくて、声の調子とか、表情とか、物腰とか、いろいろなことを組み合わせながら、工夫しながら、人はコミュニケーションをしているのではないかと思います。次に、集団づくりということを書いたのですがけれども、先ほどのお互いの関係ということに関連して、少しお話ししたいことがあります。それは集団と言葉ということです。集団と言葉は硬いのですがけれども、私たちはみんないろいろな集団に属しています。たとえば、家族というのも一つの集団です。学校へ行ったり、職場に行ったりすると、そこでもやはり集団に属している。そのほかに年齢集団とか、私ですと中年で女性でとか、出身は東京でとか、いろいろな特徴を持っている人たち同士の集団というものもあります。多くの場合、何か集団があると、その中には仲間うちだけの言葉があるわけです。たとえば、それは専門用語とか学術用語のように、その集団に入っていない人は聞いたこともない、全然分からないという言葉のこともあります。あるいは、一般的には普通の言葉として使っているのだけれども、どこかの集団に入ると特別な意味がある場合があります。たとえば、「板」という言葉、木の板とか、そういう板です。それは普通の生活で使っている言葉ですがけれども、たとえば、料理の世界では、板というと板前さんだったり、演劇をやっている人には、板というと舞台のことだったりというふうな、ある集団の中で、その集団の中だけの意味として使われて

いるような言葉もあります。そのほかにも、お互いに集団で一緒にいることによって、共通の経験をしている中でできあがっていくような言葉。そういう言葉もやはり集団の言葉の中に含まれます。そういう言葉がある場合に、同じ集団の人同士で話しているときにはとてもよく意味が通じる。それから、同じ言葉が通じるということで、とても親密さを感じるということで、人を結びつけるという、いい面があります。ただ、その一方で、今度はその言葉が、その集団以外の人にとっては見えない壁になってしまうという場合があります。たとえば、3人で話しているときに、そのうちの二人が自分たちだけで通じる言い回しとか、自分たちだけで「ああ、そうそう」と合点がいくような話題で話していると、その二人は仲良しという感じでいいのですが、もう一人の人がどうなるかという、やはりちょっと疎外されてしまうということがあります。ですから、言葉というのは、共通点を持っている人同士を結びつけることもあるし、その逆に、共通点を持たない人を遠ざけてしまうという場合もあるわけです。一般に私どもは誰でも経験として知っていることですが、自分と共通点を持った人とは話をしやすい。コミュニケーションをするのは簡単な、気をつかわないで済むことです。なぜかというと、共通点が多い相手というのは、こういうことをこういう言い方をするとこういうふうに受け取ってくれるということがなんとなく分かります。だから、あまり気をつかわずに話せます。ただ、今は地球規模で人の移動が盛んですから、身の回りでもいろいろな人と接触する機会がたくさんあります。自分と異なる相手と出会ったときに、コミュニケーションにどんなことが起こるかという一つの面白い例があるので、ご紹介したいと思います。先ほどの本の中にありますが、オストハイダ・テーヤさんといって、日本語がとても堪能で、日本で活躍しているドイツ人の研究者ですが、そのテーヤさんがある調査を行いました。足が不自由なために車椅子に乗っている人たちに話を聞いたのです。その方たちは車椅子を使っていらっしゃるのですけれども、言葉でコミュニケーションすることには全く支障がない。普通の人と同じという方たちです。そういう方たちが外に出掛けるときに、車椅子に乗っていない、いわゆる健常者の家族とか友人と二人で連れ立って出掛けようなどきがある。車椅子なので、駅でエレベーターを使いたいと思って、駅員さんに「エレベーターはどこでしょう」と車椅子の人が聞くわけです。そうすると、その駅員さんは「あっちです」と教えてくれるのだけれど、もう一人の人に向かって答えることがあるというのです。自分が聞いているのにほかの人に向けて答えられるというのは、ちょっと無視されたような、決して気持ちのいいものではありません。

せん。テーヤさんの研究によりますと、このことは車椅子に乗っている人たちだけではなくて、外国人や高齢者にも同じようなことが起こるそうです。たとえば、外国人、とくに一目見ただけで外国人と分かるような西欧の人たちが日本人の友人と歩いていて、外国人のほうが上手な日本語で道を聞いても、通りすがりの日本人は日本人のほうに答えるというようなことがあるそうです。たぶん答えている人たちは、車椅子の人や外国人の人を無視しようとか、疎外しようというつもりは全くないと思うのです。ただ、そういう人たちとあまりコミュニケーションしたことがないと、どういうふうに答えていいか、一瞬戸惑ってしまう。無意識のうちに答えやすい相手というのでしょうか、勝手の分かる相手を選んで、そちらに答えてしまうということではないかと思います。いま申し上げた例などは、相手が多種多様という話ですが。もう一つ別のこととしては、現代社会でコミュニケーションしていますと、いろいろなやり方で、つまりいろいろなメディアを使ってコミュニケーションするということがあります。一つ例に挙げたいのが、パソコンとか携帯電話でやりとりするメールです。メールのようなものは、今は非常に多くの人が使っていると思うのですが、一つにはこれは相手とすぐにやりとりができて、話すような感覚で使う場合も少なくないと思います。けれども、その一方で、打ち込むので、書き言葉、字で書く言葉というふうな、なにか複雑な性格を持ったものだと思います。その場合の新しいメディアというのは、たとえば、手紙ですと、手紙文の書き方という本を売っているように、なにかお手本のような、分からないときにはそこへ頼っておくとちょっと安心というお手本が存在するのですが、メールの場合はまだまだそんなものはありません。逆にどんどん多様化している。人によっていろいろなメールの書き方をしますし、あとは、同じ人の間でも、仕事の用件でやりとりをするか、プライベートな話題かによって、メールを書くときの文体と言いますか、口調が変わってくるということがあります。いろいろなやり方があるというのは、何でもあるということで、自由だといえばそれまでですけれども、ただ、よく分からないときに何を選んでいいか分からないという不安が付きまとうということも、やはり事実だと思います。お話の最後のまとめに向けてですけれども、今の状況として、ここまでいくつかの例を見てきていただいたように、相手がいろいろいる。それから、言葉遣いもいろいろあり得る。そして、働きかけ方もいろいろあり得る。いろいろ選べる多様性の中にいて、よく知らない、よく分からない相手と会ったときはどうするか。そういう相手は避けてしまうというのも一つのやり方かもしれません。あとは、どういう相手でも「私のやり方

はこれ」と言って、常に揺るぎなく押し通すというのも一つかもしれません。でも、やはりそれはたぶん現実的ではないのではないかと思います。一つ考えておかなければならないのは、コミュニケーションは最初からうまくいくと思わないほうがいいということです。つまり、戸惑ったり、誤解が起きたり、運が悪いと摩擦が起きたりということは、^{しよせん}所詮つきものだと思うのです。大事なことはそれにどう対応するか。なにかうまくないことが起こっているようだったときに、それにどうやって気づいて、見つけ出して、解決を探っていくかということではないかと思うのです。その解決を探っていくお互いの行動とか、歩み寄りのプロセス、そういったものが実はコミュニケーションで、伝え合いということなのではないかと私は思います。そういったことをする上で重要なことが二つあると考えています。その一つは想像力です。自分はこういうつもりでこう言ったのだけれども、どうも相手の様子を見ていてそう受け取っていないようだ。では、この人はどんなふうに受け取ったのだろうということに思いをめぐらせてみる。そういった想像力がまず大事なのではないかと思います。それから、もう一つ必要なものとして、柔軟性ということがあります。自分はこういうやり方でコミュニケーションしてみたのだけれども、それが唯一の正しいやり方ではなくて、今ここでこの相手とお互いにいちばん心地よくコミュニケーションするやり方というのはどんなものなのだろうと考えて、ちょっと違うことも試してみるという柔軟性です。最初からうまくいくはずだと思っていると、うまくいかなかったときのショックというのは大きいのですが、いろいろあるものだと思いながらコミュニケーションしていった、逆にだんだんにお互い歩み寄っていく、想像力と柔軟性を生かして両方でつくりあげていく、ということが理想なのではないかと思っています。このあと、柳町さんが留学生のコミュニケーションについて具体的なお話をしてくださるというのがありますし、そのあと、岡本さんから「違いを知る、違いをたのしむ」ということで、もっと掘り下げた具体的なお話があると思いますが、そういった違いを楽しむとか、いろいろな場合を見ていくというような姿勢があれば、多様性は決して混乱の元ではないと思うのです。その中でどういうふうにお互いがつくりあげていくかというところに重点を置くと、多様性とは実は豊かさなのだという発見。そしてその中でコミュニケーションしていく楽しさとか、醍醐味といったようなことにもつながっていくのではないかと考えております。私からはこのぐらいにさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会 続いて北海道大学留学生センターの柳町先生からお話をさせていただきます。柳町さ

んは大学を卒業後、3年間、台湾で日本語教育に従事されていたという経験をお持ちです。その後、北米に渡られて大学院で勉強しながら、日本語を教えていた時期があるそうです。それを経て、1998年に北海道大学留学生センターに赴任されて今日に至るということです。最近研究しているテーマの一つは、今日お話をさせていただく、留学生の「ソト」でのコミュニケーションがどんな実態なのかを丁寧に記述し分析していくことです。それ以外に、日本語の初級段階の漢字のシラバスづくりを一生懸命やっておられるそうです。それでは柳町さんの発表を聞いていただきたいと思います。よろしくお願いします。

「伝え合うということ―留学生の場合―」柳町 智治

(配布資料：柳町 p. 5～10)

柳町 北大留学生センターの柳町です。どうぞよろしくお願いします。私は日本語を教えているものですから、今日は留学生にとっての伝え合いという問題に焦点を当てて、日本語教育という観点からお話ししたいと思います。皆さんのお手元にパワーポイントファイルのプリントアウトがあります。大体同じですが、一部変更になっています。まず、北海道大学の留学生について簡単にお話ししたいと思います。北大に留学生が何人いるかと言いますと、今年の5月の時点で769人です。これは北大全体の学生の4.3%です。留学生というのは毎年増えていまして、過去10年間で大体300人ぐらい増えています。ですから、毎年毎年30人ぐらいの割合で増えてきているということです。この769人のうち521人が大学院生とか研究生です。これは北大の大学院全体の8.6%ということで、大学院になると留学生の割合がまた増えるわけです。北大の場合、留学生は大体3分の2が大学院生で、なかでも理系の大学院生が多いのが特徴です。というのは、農学部が農学校として始まって、たとえば、獣医学部とか、工学部とか、医学部とか、北大には理系の大きい学部が多いからです。彼らが日本語を学習しているわけですが、多くは北大の留学生センターというところで勉強しています。さまざまな授業が提供されているのですが、今年の4月には大体250人ぐらいが登録していました。ですから、留学生の大体3人に1人はうちのセンターで日本語を学習しているということです。いろいろなコースが提供されているのですが、ここに例として挙げましたが、日本語研修コースというものがあまして、私はそのコースで教えています。これはどういうコースかと言いますと、大学院に進学する前の留学生に初級の日本語を集中的に

教えるのですけれども、1日3コマ、週15コマ、毎日です。15週間、450時間で初級の日本語を教えるというコースです。私の仕事は、ここのコースで、日本語が全くできないでやって来る留学生に初級の日本語を教えて、1学期後に大学院のほうに送り出すという仕事です。今日の話は、この日本語教室の「ウチ」と「ソト」という話で、留学生が日本語を勉強している環境を「ウチ」とここでは呼びます。そして、その教室の「ソト」の、たとえば、彼らが行く大学院の研究室などですが、その場所を「ソト」と呼ぶことにします。そして、この二つの環境を対比しながら、それぞれの環境のコミュニケーションというか、伝え合いを比べながら見ていきたいと思います。資料に留学生S君と書いてあります。この例をお話ししたいのですけれども、これは以前、私のコースにいた学生です。彼は15週間のコースで成績があまりかんばしくなかった。ほかの先生も苦労されていましたが、見ていてちょっと気の毒だったのですけれども、本人もあまりうまくいかなかったのです。けれども、うちのコースは単位制ではないので、ある一定の出席時間を満たせば修了して、そのまま次の大学院のコースへ進むわけです。彼も自分の専門の大学院へ進んだ。数カ月後、私がある用事で彼の指導教員の先生と電話で話すことができました。私はまず、S君の指導がうまくいかなかったことをその先生にお詫びしようと思って電話をかけたわけですが、その先生が開口一番、電話で「非常にすばらしい学生を送ってくださった。彼はうちの研究室に来てすぐに院生の中に溶け込んで、コミュニケーションも非常にうまくいっている。大変感謝しております」と言われたのです。私は怒られなくてよかったなとは思ったのですけれども、一方で、日本語を教えているものとして、彼の私たちのコースでの評価と「ソト」での評価がかなり食い違ったという点をちゃんと考えなければいけないなというふうにその時感じたわけです。それが今日の「ウチ」と「ソト」というお話ともつながるのですけれども、まず、S君はなぜ「ソト」ではうまくいったのか、それから、「ウチ」と「ソト」というのは一体どのように違うのかということをちょっと考えてみたいと思います。非母語話者と書いてあります。留学生も非母語話者ですが、大事な場面ではうまくコミュニケーションできることが最近の研究では報告されています。では、それはどうしてなのかということをちょっと考えてみたいと思います。まず、「ウチ」と「ソト」のうち、「ウチ」を先に見たいのですけれども、これは日本語のよくある教科書のモデル会話のところの絵とか、文を持ってきたものです。いちばん上にあるのは、この人が京都に行くので「やつはし」を買ってきてくださいという会話です。それから、左下は「おたく

はどちらですか」ですから、住んでいるところの情報交換です。それから、真ん中にある絵は、何か食べたとか、何々が好きですとか、そういうことなのかもしれません。共通してあるのは、二人の人が向き合っていて、あるトピックについて話し合っている。会話している。こういう特徴があるように見えます。そして、右下はある会話テストの様子ですけども、我々が日本の授業の中の一環としてやる会話テストです。よくあるかたちですが、一つ例を持ってきました。これも同様に、まさに日本語の会話のイラストをなぞるように、二人の人が向かい合って、あるトピックについて話をする。そういうふうになっているわけです。「ウチ」の会話の特徴をさらにまとめるとするのは、「ソト」の話をしてから、あとでもう一度ここに戻りたいと思います。次は「ソト」のお話ですけども、一つ、大学院の理系研究室の例を挙げたいと思います。私はここにあるAさんという人を昔調査したことがあります。Aさんは半年間いて、彼女が理系の研究室で話をする場面をずっとビデオで撮ったというところです。動機としては、教室の中という「ウチ」はどういうところかというのは大体分かっているつもりでしたが、「ソト」で彼ら、彼女たちが何をしているかというのは全然分からなかったもので、とにかくそれを調べようとしたわけです。資料の4-2ですけども、理系の研究室に行きました。私が初めてその研究室に足を踏み入れたとき、非常に驚きました。カルチャーショックというか、私が普段日本語を教えている教室とは全く違う光景がそこにあったわけです。一方はコミュニケーションというものを教える場所で、一方はコミュニケーションが実際に行われている場所ということかもしれないですけども、かなり違う。その違いに驚いたわけです。ここに例を二つ挙げましたが、一つは、理系の研究室というのはモノが多いということです。専門的な論文などでは人工物というふうに言いますが、モノがあふれている。それから、手や体が常に動いている、そこにいる人たちです。常に動いている。そういうふうにしてコミュニケーションしている。そういう活動がそこで起きているということです。ここに写真を何枚か持ってきましたけれども、まず、左上はこの研究室です。テーブルが手前にありまして、その上にいろいろな機械がたくさん並んでいます。それから、壁の向こう側の奥の壁にもまた機械が並んでいる。こういうところで日々実験をしているわけです。それから、右側は、先生が戸棚の中にモノがあるから、それを使えというふうに言っているわけです。奥のほうの壁を見ますと、やはり窓側も機械がたくさんあって、もう窓がふさがってしまっているのです。部屋の中が暗いぐらいで、ずっと壁沿いに機械がたくさん並んでいます。ここの特徴は、べつに

選んだわけではないですけども、大抵こういう場面になるのですが、この4枚とも研究室の皆さんが立っています。座ってやるということはないのです。いつも動き回りながら実験をし、そこで会話をしている。座って一人でやることもあるんですけども、その場合も、キャスターがついているスツールというのでしょうか、あれに座ってやっている。そして、モノを取る必要があるときは、足でけてピューッと真横に移動して取る。それをいつも動き回ってやっているわけです。左下の写真は先生に実験手順の確認をしているところです。左側が先生で、右側がAさんですけども、手に持っているのは実験の手順が書いてある紙です。これをプロトコールと呼んでいましたけれども、それについて先生と相談している。それから、右側は実際に実験のやり方を教えてもらっている場面です。先生が何かを持っていて、両方とも手には手袋をしています。こういうモノとかを媒介にしながら実験しているということです。次のページですが、Aさんは自分が習うだけではなくて、これもちよっと順番が変わっていますが、人に教えることもあります。左上は、顕微鏡を見えていますけれども、学部生に顕微鏡で写真を撮る方法を教えているところです。上の右側は、ゼミの発表のあとに、先生と発表の内容についてディスカッションしているところです。間にあるのは二人のレジュメ、資料です。先生が鉛筆で、これはこうだ、これはこうだというふうに言っているわけです。左下の写真です。これが非常にぼくは面白いと思うのですが、右側が博士課程の学生で、実験のやり方を教えてもらっているわけです。左側のAさんがいて、手にはやはりプロトコールを持っています。それで、向かいにある棚から、ある薬を取ったのです。右側の先輩がこの薬を使えというふうに言っている。ここで面白いのは、先輩が取り出したビンにAさんは自分でも持つわけです。要するに二人が話しているときは、その間にプロトコールとか、薬品とか、そういうモノがからんで、お互いにそこに視線を向ける。視線を向けるだけではなくて、同時に自分の体をそのようにポジションするわけです。そして会話をここで成立させていく。つまり、相手の話を聞いているよというのは、うなずくとか、ハイハイと言うことだけではなくて、そのビンを持つということがそこにかかわっているわけです。そうやって会話が成立している。右下もそうです。これは大学院生の部屋でAさんが先輩にまたプロトコールについて質問しているんですけども、Aさんが持っているプロトコールを、今度は先輩はやはり自分で右手に持つのです。そして、二人の間にこの紙が介在していてコミュニケーションが成り立っている。こういう例です。これらの例をまとめますと、私が調査に入った理系の会話というのは、まず、

実験という活動の中に埋め込まれている。つまり、会話だけで存在しているわけではなくて、活動の中に会話があるということです。その場合、モノを介している場合がほとんどである。そして、指差しの動作が多い。モノがある。指を差す場合、これをこうしろとか、こうだあだというふうに言うわけです。指示表現が多いわけですがけれども、その場合、とくに現場指示、それも「コ」系。「こう」「そう」「こんな」とか、そういう「コ」で始まる指示表現がよく出てくるというわけです。ここにまとめましたが、発話だけでここでは会話が成り立っているわけではない。人工物とか、指差しとか、あるいは視線という非言語的な要素、それから、空間的な位置取り、配置とか移動、そういうことと絡み合っただけで起きている。下に写真が2枚ありますけれども、これを対比して並べると、左側が「ソト」で私が目撃した会話です。モノを介して、そこで二人の会話が成立している。右側は教室で想定されている会話であり、テストの場面である。二人の間にモノはない。そして、二人はいつも座っている。何かを介して話すというわけではなくて、お互いにいつも見ながら、あるテーマについて話している。ですから、メッセージのやりとりそのものがここでは目的になっている会話ということです。それに対して左側は、メッセージのやりとりというのは、ある活動の中の一部として組み込まれている。そう言えるかもしれません。「ウチ」と「ソト」の会話ですがけれども、そのデザインのされ方ということで言えば、それぞれのコミュニティーによって変わるのではないかな。この場合のコミュニティーというのは、地域社会とかいう意味だけではなくて、たとえば、ここでの理系実験室も一つのコミュニティーだし、教室もそうだし、職場とか、いろいろあると思います。理系研究室というのはどんなコミュニティーかということを考えてみると、これは調査に入ってから分かったことですが、意外にも手先の器用さとか、観察眼というものが大切な場所です。これは文系人間の私にとっては非常に意外だったのですが、たとえば、ある先生にインタビューしたときに、「どうして留学生を採るんですか」といったら、一つは国際貢献、もう一つは、日本人の学生が就職してしまっただけで大学院に残らないので、海外から優秀な人を採る。どうして採るかというのと、実験する人、実働部隊が必要だから。それはどういうことかというのと、その先生に言わせると、理系の大学院生というのは兵隊だそうです。それは実験をする人です。そして、みんなで研究室で実験をして成果を挙げる。では、先生は実験をなさらないんですかと私が聞いたら、年取ってくるとだんだん目が悪くなってきて、細かいものが見づらい。だから、細かい実験はできなというわけです。だから、若い人は実働部隊で、私はおカネを取って

きたりとか、そういうことをするんですというお話でした。ですから、実験室というのは、実験と研究を行えるという実践的な能力が非常に大切なのです。一つ、ここにサランラップの例を挙げました。これは時間がないのでビデオをお見せできませんが、左側の先生がサランラップをピーッとうまくテーブルの上に敷くのです。私は自分でやる時はいつも丸まって、くっつきますけれども、この先生は見事にテーブルの上にサランラップをきれいに敷いたのです。私はビデオを撮りながら、わあと思ったのですけれども、右側のAさんはそれについて何の反応も示さなかった。そうしたら、先生が、「今やったのは分かる？すごい難しい。こういうワザを盗まないとうまくならないよ」と言ったのです。この先生はすごくやさしい先生で、あまり言わないのですけれども、このときははっきりおっしゃいました。こうやってワザを盗むというのは非常に大切で、これをどんどん後輩に伝えていく。そういうコミュニティーです。そして、B先生が、「Aさんはどの程度こちらの話が分かっているのか、私には把握できない」とか、「言ったはずなのに実験手順を間違えることがある」ということを言ったことがあります。これを日本語の教育関係者が聞くと、ああ、聴き取り能力がないのかと思ったりするのですけれども、先生はそういうつもりでは言っていないのです。実際これをずっと追って行って、先生が、あるいはほかのメンバーが留学生の文法とか、発音とか、そういう個別の事態に言及したことはないです。私が自分から聞かない限りない。どうしてかという、このコミュニティーでは、実践的な能力、教えてもらってから、実験を一人で再現できるという実践的な能力が評価の対象だったということです。ですから、留学生にとって大事なことは、実は日本語がうまく話せるということではなくて、自分は実験向きであるということをほかのメンバーに対して示せるかどうかということが大事なんです。この場合、Aさんはサランラップを敷いたときに、それに対して反応しなかったというのは、自分が実験向きの学生だということを示すのに失敗してしまった例です。だから、先生が「ちゃんと見てろ」と言ったわけです。ですから、そのときに、「ああ」とか、「すごいですね」とか、「どうやるんですね」と言ったりとか、あるいは、何か分からないことがあったら聞き返すとか、そういうときに当然言葉を使うわけですが、言葉というのは、ただそれを使うわけではなくて、実験という実践の中で初めて使われるということです。では、教室はどんなコミュニティーかというお話ですが、あるフランス語入門クラスのお話をします。教師と学生がいて、教師はフランス人で、学生は私だったのです。ある別の調査のために私はフランス語の入門クラスをとって、これは授

業の大体3回目ぐらいだったのですが、先生が「あなたはイギリス人ですか」と聞いた。私は「はい」と答えたわけです。そうしたら、ほかのクラスメートから、そうじゃないと言ってすごく笑われたのです。これは何が起きたかという、私は「イギリス人ですか」と聞かれたときに、「アングロ」その言葉を聞いて、これはぼくに対してイギリス人ということを知るわけがないと思った。「英語は話せるか」と聞いたと思ったのです。だが、ぼくは「はい、(私は英語が話せます)」と答えた。こういうことをぼくは言っただけだった。ここで何が起きたかという、ぼくはそのとき学生として、教室というコミュニティは常識を働かせるコミュニティではなく、文法とか語彙の知識が試されるコミュニティだということが分かっていなかった。ほかの人たちにとってはそれは自然だったらしいですが、実は私も普段は、日本語の先生として、そういうコミュニケーションをいつもしているのです。知識を試す、試される、コミュニケーションのための質疑応答ではなくて、こういうコミュニケーションを結構している。けれども、いざ自分が学生になったときにはなかなかできなかった。これに慣れるまで2カ月ぐらいかかったのです。ここで二つ問題があって、私は学習者として文法とか語彙の知識が足りなかったという点と、もう一つ、教室というもののコミュニケーションのあり方が、そのときまだ理解できていなかったということです。教室での会話というのはそのようにデザインされていることが多いということです。最後、まとめですけれども、留学生にとっての「伝え合い」というのは、おそらく発話だけではなくて、言葉だけではなくて、そこにあるモノとか、非言語要素とか、空間的な配置とか、移動とか、そういうことと絡み合っているだろう。そういうものと並立しているはずだ。それから、もう一つ、「伝え合い」というのは、その場の実践、そのコミュニティにおける実践と切り離せないだろう。それは実験室であるかもしれないし、教室であるかもしれないし、あるいは家庭における親子とか夫婦の会話であるかもしれないし、とにかくその場の実践と切り離せないのではないかという点です。それから、当たり前のことですが、我々は言葉を使うためにコミュニケーションしているわけではなくて、ある実践を行うために言葉を使っているわけです。ですから、言葉というのはそういう実践を行っていく上での、あくまで一つのリソースであるということです。それから、最後に書きましたが、大事なことは、コミュニティの有能な一員であることを示せるかどうか。やはりそれが留学生には関わっていると思います。それは教室であるかもしれないし、実験室であるかもしれない。ここには書いていないのですけれども、これは同時に母語話者にも言え

ることだと思うのです。つまり、こういうことができるかどうかというのは、言語の母語話者としての能力という部分に焦点を当てれば、日本語母語話者と留学生というのは対比的に扱われるけれども、それ以外の面を見れば、これは同時に母語話者にとっても非常に難しい問題であるのではないかということです。というわけで、今日は留学生の「伝え合い」ということで、留学生の例を挙げてお話ししました。熊谷さんのお話を受ければ、柔軟に人々の「伝え合い」というものを見ていく視点があったらいいのではないかと考えております。以上です。ありがとうございました。

司会 続きまして岡本さんから話をさせていただきます。岡本さんは社会言語学が専門で、普段どういう研究をなさっているかと聞きましたら、テレビとかのメディアを通した言葉の談話分析を追いかけているそうです。それをメディア・リテラシーというふうに専門的には言います。一例を挙げると、たとえば、スポーツに関連した新聞記事の分析などもやっている、あるいは、やっていこうとしているということ、それから、配置、レイアウトとか、色使いと言葉との相互作用、どのように言葉は使われているかなど、それからつくり出されている意味についての分析、研究を最近はやっているそうです。そういったことの研究動向も含めて、岡本さんの発表を聞いていただければと思います。では、よろしくお願いします。

「違いを知る、違いをたのしむ—言葉を通して関係性をつむぐために—」

岡本 能里子 （配布資料：p. 11～19）

岡本 それでは、お話しさせていただきます。私のテーマは「違いを知る、違いをたのしむ」ということで、今日本の中でどのようなコミュニケーションの状態が起こっているのかというようなことを見てみます。そして、私も柳町さんと同じように、大学で留学生に日本語を教えています。ですから、そこで行ってきている連携というか、授業の様子も少し組み込みながら、一緒に「伝え合う」ということはどういうことなのかということを考えていければと思います。早速ですが、今日、追加資料でこういう別の紙が配られていると思います。その紙の1枚目の裏側に絵があると思います。その絵の四角の中に、皆さんがどういうふうに答えをお書きになるか、簡単に思いついたものを書いていただいております。これは後でお話の中に入れてたいと思っています。これは小学校の1年生の国語の授業で、宿題に出たものだからです。「身ぶりの働き」ということを学ぶところですが、このようなプリントがあったそうです。ですので、

お話ししている途中で出てきますので、これを書いてみてください。よろしくお願いします。それでは、始めさせていただきます。現在はさまざまなところで日本語の表現能力について、そして、言葉について注目されていると思います。では、それにはどんな背景があるか考えてみると、2003年には日本の国内への留学生の数が11万人を突破して、1983年に中曽根首相が提唱した留学生10万人受け入れという計画が数字上では実現されたという形になっています。また、外国人登録者の数も年々増えていまして、群馬県の大泉町というところでは、住んでいる方の15%が外国人ということになっています。さらに、それと関係して、小学校、中学校、高校における外国人の児童、生徒の数も増えていて、在籍している学校の数はずでに5000校以上ということになっています。さらに国外では、当然のことにグローバル化による人々の移動が起こっていますし、インターネットによる情報の交換も盛んになっています。そして、ちょっとこれは余談ですけども、国内でも今、たとえば、お相撲の世界でも、今は毎日、ブルガリア出身の琴欧州が連勝を続けていることもありまして、さまざまな外国人の方に日ごろいろいろなところで出会うということが分かるのではないかと思います。それでは、日本語の表現力への注目というのはいつごろから起きてきたものなのかということを見てみたいと思います。ここにありますように、学習指導要領では1989年から自己表現力の育成ということに注目していまして、英語ではコミュニケーション能力の育成ということでオーラルの授業が入りましたし、国語科の授業では2002年から、話すこと・聞くことの領域が設けられて、それが目標や内容のいちばん初めに位置づけられているということになっています。さらに、国語に関する世論調査などから見ても、人々の言葉遣いへの高い関心というものが裏づけられます。その一方で、今年、世界各国で行われた子どもたちの学力調査を調べた結果が報道されたことは記憶に新しいことですが、それには子どもたちの読解力が低くなっているということが出ていました。とくに考える問題、考える力が数学でも落ちているというようなことも出ていたかと思います。また、書店に行きますと、2001年からと言われていますけれども、日本語ブームがずっと続いていまして、『声に出して読みたい日本語』という本とか、また、『問題な日本語』という本もベストセラーとかミリオンセラーとなっています。それでは、今回のテーマにもなっています「伝え合い」ということですが、伝え合う力、伝え合うというのはどういうふうにとらえられてきているのかということを見たいと思います。英語ではコミュニケーション能力というふうに先ほど言いましたけれども、では、「伝え合う

力」と「コミュニケーション能力」というのはどういうふうに位置づけられているのか。これは同じなのか、違うものなのかということを見てみたいと思います。ここにありますように、2002年に文部科学省のほうから「英語が使える日本人」育成のための行動計画が出されて、その年の7月に文科省のホームページに、この二つの関係が考えられるような言葉が出ていました。それを簡単に言いますと、言葉は力と言われます。自分の考えや主張をはっきり言えるためには「言葉の力」を磨くことが必要です。もちろん、まず、正しく美しい日本語を身につけることが第一ですけれども、グローバル化する社会の中では、それだけでは足りない。今や国際的共通語となっている英語のコミュニケーション能力を身につけることがどうしても必要なのですというような内容でした。ここに見られることですが、国語教育に関しては、「正しく美しい日本語」という言葉が使われています。そして、英語教育では、「自分の主張を持ちそれを明確に伝えるためのコミュニケーション能力」という言葉になっています。このことをさらに国語教育の中のことで考えてみますと、国語教育には、いままで学習指導要領の中で二つのことが行き来していたと言われています。その一つは会話力といわれるものです。それから、もう一つが国語力といわれるもので、国語力というのは、日本の伝統的な言語文化の摂取に関することがらということになっています。一方、会話力というのは、日常の言語生活に必要な言語能力の育成に関することとなっています。これで見てみますと、「伝え合う力」ということに関しては、今の会話力のほうに動きが向いているということになります。しかし、いつもこの二つが行き来しているということに関しては、とても考えるところがある問題ではないかと思うわけです。それでは、日本社会の中でのコミュニケーションの状況がどうなっているのかということを見てみたいと思います。まず、一つは、何のために勉強するのかが分からないという子どもたちがとても増えているということがよく言われています。さらに、表にいたしましたけれども、これは国語教育を実践されている大平先生の発表ですけれども、無発言行動というのが最近増えていると言われています。これは皆さんの冊子の中には表の左の数字が入っていないと思いますので、ここを見ていただくと分かるかと思います。無発言行動というのは、教師に問われても答えない、発言を促されても話そうとしないというようなことを言います。では、いつから教室で話そうとしなくなったのかということですが、それを生徒に聞いてみたところ、小学校からが10%、中学校からが41%、高校から話さなくなったという人が22%、大学からだという人が4%だったとのこと。つまり、これはどういう

意味かと言いますと、大学に入ったときにすでに、小中高の合計になりますから、73%の学生が話す意欲を失っているということを表していると言えます。それでは、もう少し詳しく学校の現場を見てみようと思います。今見たようなことがある一方で、これは高校生に聞いたことが報告されているものですが、まず、一つ目は、「先生の考えに沿う意見でなければ権威をふりかざして生徒の発言を封じ込めてしまう」、また、「先生から名前を自分たちは呼び捨てされている」「敬語を使えと指導されるのに先生は生徒に「です/ます」さえ使わない」というふうに言っているということが出ていました。さらにもう一つ、面白い発表がありますが、それは日本とスウェーデン、中国、アメリカの4000人の14歳から15歳の生徒に聞いたことです。自分の能力を信じて、今の自分を積極的に評価できる力を自信力と言いますが、それを聞いたところ、日本の学生たちがいちばん低いということになっていたそうです。このことは「伝え合う力」をはぐくむ教室の場が、学びの意欲も、他者と関係を結ぶようにする機会も意欲も失っている。そして、自分の言葉に自信が持てず、言葉を使ってほかの人と関係を結ぶこともあきらめてしまっているという状態が見えると思います。さらに、日本の現在のコミュニケーション事情では、これも皆さんよくご存じではないかと思いますが、ずっと売れていると言われる、男女でコミュニケーションのスタイルや摩擦があるということで『話を聞かない男、地図が読めない女』という本であったり、『わかり合えない理由』というような本があって、この本はアメリカでベストセラーになりました。これらは男性と女性が話す目的が違うとか、さらに、男性と女性の脳のつくりが違うのではないかなというようにことまで話が及んでいます。しかし、これが売れるということは、なにかそういうことを感じている人が多いということも事実なのではないかと思います。さらに、次は家庭ですけれども、そこでは子どもの気持ちが分かりにくいと言っている人が59.4%ある。さらに、次は病院でのやりとりです。病院で「おじいちゃん、お注射しましょうね」というふうに言われる。それは子ども扱いされているようでいやだ、名前を呼んでほしいという声があるということです。さらに、私の経験でも、留学生の不満では、断るとき、または反対意見を言うときに、どうしてすぐノーと言わないのかというような不満を聞いたこともあります。これらを総合してみると、今日の社会では、異なる母語を持つ人同士のコミュニケーションのみではなくて、このような異質の他者とのコミュニケーションも異文化間コミュニケーションと考え、そのような場になっているのではないかと考えられます。では、これらの問題の所在というのは何かということを見て

みましょう。まず、通じないということですが、自分の言葉に自信が持てない。そして、正解を当てるという言葉だけになってしまっているということです。それから、学力の差は、言ってももうしかたがないんだ、関係をつくる必要がないし、言ってもしかたがないことというような考えになってきているように思われます。これらのギャップというのは何なのかを考えてみると、これは文化人類学者のベートソンという人が言っていますが、フレームの違いなのではないかと考えられます。フレームとは何かというと、相手との関係や発話の場面がどのようなものかをとらえる枠組みのことです。たとえば、先ほどの教師と高校生では、教師は上下関係のフレームで考えているということなのですが、高校生は上下関係というのは分かっているけれども、一人前の人格者として、もう高校生なんだから認めてほしい、発言もきちんとそのように受け止めてほしいというフレームで話していると考えられます。また、高齢者のことについてですが、「名前を呼んでほしい」と言っているのは、援助される側とか、今介護されているとか、そういうことは分かっているけれども、それを前提として、「独立した1人の人格として認めてほしい」というフレームの違いであると思われる。それでは、これらをもう少し見てみると、一つは、「助けてあげる」「何々してあげる」というやさしさがあるわけですが、やさしさというのは、相手の言葉への権力や暴力、抑圧になってしまうこともあるということです。ボランティアの日本語教室に通っている外国の人から聞いた話ですが、洋服をもらったり、食べ物をもらったりする。私はそういうものをもらいたいわけではない、くださっている方はいい人で、とても親切にしてくださっているというのはよく分かっているけれども、というので相談をされたことがあります。このようなことも同じことではないかと思います。このように、とてもやさしいということが、ある意味、弱者には抑圧になっている場合もあるのではないかと思います。それでは、先ほどやっていただいた件ですが、どのような言葉を皆さんお入れになったかなと思うのですが、いちばん最初の「鳥が」というところは、「鳥が飛んでいる」になさった方、手を上げていただけますか。では、2番目の「さくら草が」というところは、「さくら草が咲いている」になさった方はいますか。それ以外にもいろいろなことを入れてくださったようですが、これはどういうことかと言いますと、ある人が「じゃあ、どういうふうに答えたいと思っているの」と聞いたときに、1年生のユウ君という子がその答えに迷ったのです。さくら草のところ。鳥のところはユウ君も「飛んでいます」と入れたのですが、さくら草のところで迷ったそうです。そして、それ

をどうしようかなと思っているということなので、「どう書きたいの」とその人は聞いたそうです。そうすると、二つのさくら草がとても楽しそうに話しているようなので、「遊んでいます」というように書きたいと言ったそうです。じゃあ、そういうふうに書いたらということで、そう書いて出したところ、それがバツで返ってきたということです。そのときにとても大事なところは、さらにそのバツが単にバツになっていなかったそうで、先生が丸にしかけて、バツになっていたという点だということです。ということは、先生もそこで迷われたのではないかということが考えられるわけです。ですから、ここでは正解は一つということに関する、先生の中での葛藤^{かつとう}もあるし、さらに忙しさということもあるかもしれないけれども、そこでやはり、そこについてどうすればいいかという、この子とのやりとりの時間がもしあれば、もう少しお互いに違うコミュニケーションができたのかもしれないと思います。これは皆さんにお配りした紙ですけれども、次のところを簡単に見ていただきたいと思います。いちばん上の紙です。これは私のクラスの日本語の学習者と、それから、他大学の英語の授業の日本人の学生が、掲示板というインターネット上のコミュニケーションの場を使ってやりとりをした結果です。このときに、犬を食べるということについての話題が出ました。犬を食べるということについてどう思うかというやりとりがあります。これを見ていただきますと、ここにあるように、最初は犬を食べるなんて信じられないとか、考えられないと書いているわけです。名字で留学生と日本人学生が分かっていたかと思いますが、日本人だったら、ウナギを食べるということと同じじゃないかとか、韓国人だけではないんだというようなことが出てきたりとか、さらに、日本人が馬刺しを食べるということを考えてみてもらうとどうかとか、そういうようないろいろなやりとりがありました。そして日本人も、自分も今ブタ肉などを食べていることも変なのかもしれないとか、もし自分が韓国に生まれれば、それを食べることはなんでもなかったかもしれないということ、そして、馬刺しも自分は食べないけれどもというようなことが出てくるわけです。このように見えてくると、韓国人というステレオタイプのひとくくりになっているものが、個人としてどうかというやりとりになってきているのが見えてくるような気がします。それから、もう一つの実践例を挙げます。ある小学校のコミュニケーションのクラスで、キレずに、攻撃せずに、自己主張するということを行っていらっしゃる先生がいるそうです。その先生のことが新聞の記事に出ていました。その先生のお話では、二人ずつペアを組んで、あることについて話し合いながら、どうして違いがあるのかというところで、あきらめ

ずに一生懸命自分で違いを説明していく、そういうことを実践なさったそうです。そうしているうちにだんだん忍耐強く、自分の考えや意見をよく考えて説明する態度がついてきたということです。このような社会の変化に伴って考えられるコミュニケーション能力、言語能力は何かということですが、新たな「伝え合い」のためのコミュニケーション能力として考えてみました。まず、一つは、違いを知ることです。それは他者のフレームと自分のフレームの違いを知って、それを認識してみるということです。そして、ぶつかり合いや摩擦を経験すること。それが自分を知るスタートラインと考えてみるとどうでしょうか。そして、他者が自分を知らせてくれる存在であること、それとは逆に、他者にとっても自分がそうであるということ、その人の前に他者がどういう人であるかを知らせる存在として立っていることを考える必要があると思います。さらに、違いを楽しむとしましたが、フレームの違いやフレームのぶつかり合いというのは、たしかに痛みが伴うし、大変なことです。しかし、いつもふれ合う、たとえば、家族とか、兄弟というのはそれから逃げられないわけですから、いつもいつも嫌な思いをして我慢しているということはありませんし、時間の無駄です。ですから、頭を切り換えて、その「ずれ」というものに興味を持つ。そして、自分に興味を持つということにつながるとは思います。そこにずらしを入れて楽しんでみるということも大事ではないかと思います。よく何か言ったときに「なあんちゃって」みたいなことを言います。それ自体はフレームをずらしていると考えられることができると思うのです。先ほどのベートソンの中でも、サルがお互いにかみつき合っているときに、それが実際に攻撃し合っているのか、じゃれ合っているのかということで全然結果が違う。つまり、一見同じことであっても、それがじゃれ合いのフレームであれば親しさを表すわけですし、攻撃であれば、それは敵対を表すことになるということです。この下に少し書きましたが、結局、人間というのは、抑圧されているときに、それを直接言えない場合に、そこにちょっとジョークを入れてみたりすることで抑圧から逃れる。『スターリンジョーク』という本が出ているように、抑圧のある社会ではそういうものが発達するということが説明されていました。その点もとても面白い言葉の力ではないかと思います。さらに若者言葉や絵文字なども、もともとは、なんかかわいいんじゃないかなと思って作ったと言われています。ですから、作ったほうはかわいいだけと思っていても、今携帯電話のメールを調べてみると、それがトピックを移すときのマークに使われているなど、そういう新しい約束ごとが作られていっているのが見えてきます。つまり、コミ

コミュニケーションがある意味、豊かになるように使われていると考えられるのではないかと思います。さらに、もう少しここを進めると、今のうちに、いろいろな摩擦があっても、それにずらしを入れ、それを楽しむ。そして、その一方の点を深く考えてみると、言葉を尽くしても歩み寄れないこともあるのだ、ということを知ることとても大切なのではないかと思います。その場合、コミュニケーションを停止することもありだと思っています。これはあきらめではなくて、新たな接点を探るために時間をつくる、考える余裕を持つということだと思うのです。そして、どちらかのフレームに合わせるのではなくて、自分のフレームを力で押しつけるのでもなく、言葉を通してあきらめずに、粘り強く他者との関係を紡いでいく力、それが大事ではないでしょうか。また、新しいフレームを双方で協力してつくり上げていく想像力も大事ではないかと思います。今後の「伝え合い」についてですけれども、何のために伝え合う力やコミュニケーション能力が必要なのかということを、もう一度考えてみるのが大事なのではないかと思います。多くの摩擦や葛藤を乗り越えて、あきらめずに粘り強く、異質の他者と快適に生活していける。そして、一緒に、お互いに共育し合っていく。「共育」という文字にしましたけれども、共育し合って、そして、新しいフレームをつくり、新しい言葉の意味を生み出していくというような社会实践として言葉の学びというのはとらえられるのではないかと思います。言葉はいつもその人の中から、その人の力で出てこなければ力にはならないと加藤哲夫さんという方は言っています。私もとてもそれに賛成します。そのような実践の前提としては、柔軟な自己を自由に往復しながら、他者とコミュニケーションする。そして、さっきの「さくら草が遊んでいます」というような言葉を取り込むことができるような心の余裕や想像力、そして、そういう環境をデザインする力というのがとても大切なのではないかと思います。これで私のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会 前半の三つのお話をここで終わりとしませんが、約10分ほど押してしまいました。恐縮なのですが、終わりの時間を4時40分に変更させていただくことを許していただければと思います。休み時間を30分は取りたいという要望がありましたので、そのとおり取りたいと思います。これから3時25分まで中休みとさせていただいて、そこでお茶とかお菓子をつまみながら、懇談していただければと思います。では、3時25分までにまた席に戻ってきていただければ幸いです。前半のお話に関する質問の紙は、係のものが後ろのドアのところに立っていますので、渡していただければと思います。では、休憩に

入りたいと思います。よろしくお願いします。

<休 憩>

【ディスカッション】

参加者 1 ……ですけれど、我々としては成功なのですけれども、それが反発で悪い状況をつくっているのではないかなと、与える影響に対して最近はおくびょう病になりつつあります。そういうところは、我々の業界ではそんなに意識してこなかったのですが、今こういうお話を聞かせていただくと、言葉をこれからどう広告の中で生かしていこうかということ、再度私などは考えて、上手に使っていきたいと思っております。

司会 急な指名で失礼しました。ありがとうございます。広告の世界は特にビジュアルと言葉の関係で、ビジュアルなものが先行していた時代から、言葉が今先行しつつあって、言葉をどう大事に使っていくかというお話だったと思います。そうしたことで、言葉をどう大事に使っても、しっかりしたコミュニケーションを誰かと取りたいと思っても、なかなか親密な関係まで至らない、あるいはきちんとした対話になりきれずに悩んでいらっしゃる方は、世の中に少なくないと思います。一般的な質問として、コミュニケーションをしっかり取るために、特にどういう点に気をつければいいかという質問がここにも来ているので、今日の冒頭に話をしてくれました熊谷さんに伺いたいと思います。

熊谷 ご質問ありがとうございます。私たち、誰でもそのことについては一度は考えたことがあることだと思いますし、とても難しい問題だと思います。人間関係というときに、いろいろなコミュニケーションの働き方というものがあって、一つには、相手と仲良くなりたいから、親密な話し方をしてみることがあると思うのです。それはうまくいくときもあれば、うまくいかないときもあります。たとえば、相手のことを「おまえ」と呼んだとします。「おまえ」と呼んでいる側は親しみを込めて「おまえ」と言っているつもりでも、相手側にその人から「おまえ」と呼ばれる筋合いはないだろうと思う意識がもしあったとすると、それはただの乱暴な言い方、ぞんざいな言い方、失礼な言い方にしか聞こえないかもしれません。そういうふうな試行錯誤を重ねながら、私たちはいろいろな人とかわり合っているのだと思います。コミュニケーションというのは、そのときの関係とか、先ほどもちょっと申し上げた、相手が居心地が悪くないという形の時にたぶんうまくいく。でも、お互いがどういう状態なのか、相手が何を望んでいるか

ということは、相手の顔をただ見ているだけでは分からない。結局、それをするためには何かをたとえば言ってみるとか、実際にコミュニケーションをちょっとしてみる。そのときの様子です。そういうことから、コミュニケーションの時間を重ねていくことによって、自然にお互いのことを分かり合う。しばらく前にはどうも居心地が悪かったコミュニケーションの仕方が、だんだんそんなに居心地が悪くなくなっていくというふうには、やりとりとか、かかわり合いを続けていくうちに、お互いの間にも変化が生まれて、また新しいコミュニケーションの仕方が出てくるということなのではないかと思います。

司会 今の一般的な質問に対して、留学生の教育でいろいろ実践をやっている柳町さん、何かあればお願いします。

柳町 その質問の前に、先ほど外来語の話が出たので、一言言いたいのですけれども、たとえば、留学生と、あるいは外国人と接したときに、よく外来語を使ってコミュニケーションするということが起きますが、実は多くの外国人にとって日本語の外来語を聞くのは非常に難しいです。たとえば、英語から日本語になったものを聞いたときに、全く何のことか分からないというのがよくあります。それから、たとえば、日本語を教えていても、普通、ひらがなの和語は聞き取れるけれど、カタカナ語は全然分からない。そういうこともよくあります。ですから、必ずしも外国人にとって外来語は簡単なものではないということです。それから、コミュニケーションがうまくいくかどうかという話ですけれども、私の話に引きつけていうと、日本語の能力自体は高くても、うまくコミュニケーションができない学生もいれば、その逆のケースも十分あると思います。先ほども例がありましたけれども、どういう人なのかというと、その学生がそのコミュニティの中でどういう位置づけにあるかということがやはり大きい。たとえば、理系の場合だと、機械をみんなで共有して使うわけです。機械を使わせてもらうとか、あるいは機械の使い方を教えてもらうときに、その人がそのコミュニティの中に受け入れられた人でないと、その前提としてコミュニケーションが起きないということがあります。ですから、必ずしもその人個人の言語の能力だけが問題ではないのかもしれない。そして、それは留学生に限らず、日本語を母語とするものにとっても同じかもしれない。たとえば、全く知らないグループに入ったときは、なかなかコミュニケーションが進まない。もちろん共有知識がないということもありますけれども、コミュニケーションがうまくいくかどうかというのは、必ずしもその人の持っているコミュニケーションの能力自体の問題ではないのかもしれないなと私は思います。

司会 今の流れで、岡本さんのほうに個人的に質問が先ほど一つ来たと思いますけれども、その質問に対する回答を含めてですが、今の一般的なコミュニケーションに重要な点とからめてお話をしていただければと思います。

岡本 私あてに質問をしてくださったものがありますので、その質問を読ませていただきます。御意見はそのとおりだと思いますけれども、実際には違いを楽しむ余裕や遊び心を持ってない、持てないから世界中に紛争が起こっているのではありませんかという御質問です。これも本当にもっともなことだと思うのですが、世界中で紛争ということを書いちゃって、やはり戦争というのはもともと個人のコミュニケーションのずれからというのは言われていることだと思うのです。これについては本当に難しい問題だと思うのですけれども、楽しむ余裕というのは、やはりすぐというのは私も出てこないと思うのです。実は、私自身は関西出身です。これもひとくくりにはできないのですけれども、関西出というのは、本当に笑いというものを日常によく使っているというか、要素としてあります。私も育った環境で、親が交渉しているときにいつも一緒にいました。そこに笑いを入れながら、そうするとそこに交渉が成り立つというところをよく見てきていて、やはりそれというのは小さいときからの学びというものもあるのではないかなと思うのです。それには心の余裕というものももちろんあるでしょうけれども。ですから、やはり時間がかかることではないかなと思います。若い世代は、今楽しむとか、楽しいということ自体、とても好きなことだと思うのです。たとえば、高校野球を見ても、49校、代表校があったのですが、その中の6校か7校ですでもう「試合を楽しむ」という言葉を使っているし、このあいだ宇宙から帰ってこられた方も「楽しかった」ということを言っていて、楽しいということがかなり大きな要素になってきているのです。重い・長い・大きいという時代から、軽い・薄い・小さい、そして楽しい、それから、単調の単という字、創という時代に移っているということが書いてあるものがありました。そういうふうに変化が来てきているということは、やはりコミュニケーションもそういう中で受け入れられやすくなってきているのではないかなと思うのです。ずらして面白さを出すというのは実は難しいことだと思うので、それをやるには知恵が必要だと思うのです。ですから、何か実践の場所で、先ほども少し言いましたけれども、楽しい活動と一緒に考えていくということが大事なのではないかなと思っています。私もまだそれは分からないところがあるのです。先ほどおっしゃったCMに関しても、キャッチコピーをつくらうというようにやってみているのです。そうすると、そこにパロディーを入れ

てみたりする，そういうのは学生たちは好きなので，何かそういうことを粘り強く積み重ねていくことが大事なのではないかと思います。

司会 今岡本さんの話，知恵が必要だという話がありました。楽しむためにも必要だし，ずらすためにも必要だということなのですが，我々の話が話で終わってしまうと，知恵がなかなか知見として得られないので，実は横にお二人，小林ミナさんと杉戸清樹所長にコメンテーターとして来ていただいています。これから質疑応答の内容，それ以前の発表の内容を含めて，コメントをしていただきたいと思います。最初に小林ミナさんから，日本語教育の観点から今日のお話を分析，あるいはコメントしていただきます。よろしくお願いします。

小林 初めまして，小林ミナでございます。私も柳町さんと同じ，留学生センターというところで日本語を教えることをなりわいとしております。私は日本語教育の立場からコメントということなのですが，日本語教育，あるいはそのための基礎研究，ちょっと広くとらえて，三つのことを申し上げたいと思います。日本語教育というのは，最近だいぶ浸透してきましたので，国語教育との違いは恐らく皆さん分かってくださっていると思うのですが，端的に言ってしまうと，外国人に日本語を教えるのが日本語教育で，日本人に日本語を教えるのが国語教育。非常におおざっぱな区別がございます。日本語を学ぶというプロセスをこんな図式で表すことがあるのです。これは非常に簡単なもので，学術的な図ではないですが，外国人とか非母語話者，日本語が分からない人が，右上の，日本人とか日本語母語話者に近づいていく過程が日本語を学ぶということなのだ。これは習得曲線などと言われることもあります。ヨコ軸は時間で，時間がどんどんたっていくと，どんどん日本語話者に近づいていくというような曲線があります。これは当然一律に右肩上がりではなくて，たとえば，学んでも学んでも上手にならない足踏み状態のときがあったり，ある場合はちょっと後退する時期があったりとか，そういうプロセスを踏んで近づいていくというのを前提に，たとえば，日本語教育であつたら，日本語の習得研究の人は研究をしていくのですが，ふと思ったのは，タテ軸というのは一体何なんだろうということなのです。時間は，もちろん時間がたてば右へ行くのはいいのですけれども，タテ軸というのは，言語能力とか日本語レベル，漠然と言語レベルと言われているのですが，では，コミュニケーション能力なのだろうかと考えると，それは違うのではないか。たとえば，ここにいらっしゃる方々は，外国人，日本語はそれほど上手ではない方を教えていた経験をお持ちだと思うのですが，言葉は通じなかったけれども，

何か心が通じ合えたとか、分かり合えたという実感、あるいは日本人同士で話は通じているのだけれども、なにか分かってもらえなかったという実感、そういうものを経験として持っています。あるいは今日の柳町さんの話で言うと、留学生に対する評価というのは、その人がどれだけ複雑な敬語を知っているとか、たくさんボキャブラリーがあるのではなく、もっとトータルなところで評価が決まっている。そうすると、日本語が上手になる、日本語のレベルが上がるということと、コミュニケーション能力が上がるということは必ずしもリンクしていない。にもかかわらず、私も含めて日本語教育にかかわるものというのは、日本語が使えるようになれば日本語のコミュニケーションも上手になる、日本語のコミュニケーション能力も上がるということと、言葉が適当かどうか分かりませんが、非常に無邪気に信じすぎているのではないかと、いたのではないかと思います。それがまず一つ目です。二つ目としては、右上にある母語話者というものについて考えたいのですけれども、母語話者というのは、学習者にここを目指してあなたたちは日本語を勉強しろという、あるいは目標なのですが、その目指させている母語話者というのは、本当にそんなに一般的なのだろうかということです。これはどういうことかと言いますと、外国人とか日本語学習者というのは、いつも日本語能力の点で劣っていて、母語話者はいつも優れているのか。そうではない。日本語母語話者であっても劣っているとか、優れていない、不自由を感じることもあるのではないかと。これは何の例かと言いますと、留学生センターの留学生を連れて地域の小学校に小学生との交流会に行くことがあるのですが、その準備段階で小学校の先生がプリントを作ってくださって、「体育館に集合」と書いてあったのです。「体育館」と「集合」は漢字だったので。これはたぶん留学生には分からないと思うから、ちょっと改善してもらえないかと事前処理の段階でお願いしたら、次に何が起きたかという、「体育館」という文字がタテヨコ2倍になって、ものすごく大きな文字になって出てきたのです。「体育館」という文字が小さいから読めないけれど、大きくすれば画数がちゃんと分かるから分かりやすいだろうという先生方の配慮だったのです。実は、小学校1年生ではそれでいいかもしれないけれど、留学生はそうではなくて、できれば「たいいくかん」と平仮名がついたほうがいい。けれども、「たいいくかん」と平仮名にしたところで、それは一体何を差すのかが分からないわけです。そうすると、たとえば、「スポーツをする建物」といえば、学校にそういう設備があるというのは分かるだろうし、あるいは「体育館に集合」ということは、べつにその建物の用途が分からなくても、とにかくそこに行けばいいわ

けですから、「学校でいちばん大きい建物」という言い方でもいいかもしれない。あるいは目の前に体育館が見えるような場所でそれを説明するなら、「あそこ」ということでもいいわけです。そうすると、そこで思ったのは、言語的弱者と言いますか、ある言語に関する弱者に対する、では、どういうふうに対応していこうかという引き出しが、やはり我々のほうでは少ないのではないかと。先ほど岡本さんのお話にもあった「おじいさん、お注射しましょうね」というのも、言語的弱者。お年寄りたとえば、耳が遠いのか、そういうものがあつたとしても、言葉に不自由というのは、すぐ子どもを連想してしまって、子どもに向かって「ぼく、わたし、いくつ？」と話しかけるのと同じように、「おじいちゃん」という子ども口調になってしまう。それが一つのあらわれなのではないかという気がします。相手が分からないときに、相手が何に戸惑っていて、どういうふうに言い換えれば、どういう説明すれば分かるのかというのは、まさに熊谷さんがおっしゃった想像力であり、柔軟性であるのではないかという気がしました。これは私自身の経験なのですが、名古屋に行ったときにトンカツ屋さんがあつたのです。駅の前の通りに。私は名古屋に住んでいたことがあるのですけれども、そこに手打ちトンカツというのぼりが立っていた。手打ちトンカツです。私は手打ちそばとか、手打ちうどんは聞いたことがあるけれども、手打ちトンカツというのは聞いたことがなくて、何だろうとずっと思っていた。店に入ったら、メニューがあつて、手打ちトンカツ定食とか、手打ちトンカツ、単品とかいろいろあつて、ただのトンカツと料金が違う。手打ちトンカツのほうが高いのです。それで、どうしようと思って、店の人に「すみません、手打ちトンカツって何ですか」と聞いたら、アルバイトだと思うのですが、女の子が「少々お待ちください」と厨房に行つて、戻つてきて、「ブタ肉に衣をつけて揚げたものです」という答えが返つてきた。それはトンカツの説明で、全然手打ちの説明になっていないと思ったのですが、私の質問に対して彼女からそういう答えが返つてきた。この場合は、私は手打ちトンカツが分からなかった。まさかトンカツを聞いているとは思われまいだろうから、手打ちが分からないから手打ちトンカツを聞いたのだけれども、あちらは私がトンカツが分からないと思った。そこまで極端な例はないかもしれませんが、ネイティブ、日本語の母語話者だからといって、常に言語に対して不自由をしていないとか、あるいはそういうことに関して誤解を生じなくはないのだということの一つの例なのではないかと思いました。最後の点ですが、先ほどの岡本さんのお話にあつた国語教育の目標というのが、子どもたちに正しく美しい豊かな日本語を学ばせようということなの

ですが、日本人の大人が正しく美しく豊かな日本語を話しているだろうということだと思のです。本当にそうなのかなということです。日本語の特徴というのがよく言われますが、類型論的に言うと、日本語だけが持っている特徴というのはあまりなくて、ただ、よく言われるのが、日本語は語彙が豊富である。では、いくつかの言葉を学べば新聞の題材の何%ぐらいのことが読めるかといったときに、日本人の大人が会話をしているデータで使われていた形容詞を拾い上げたのです。そうすると、236個、形容詞が使われています。これは「小さいです。」というふうに文の最後に使われるもので、「おいしい料理」という連体修飾の例は省いてですが、文の最後には236の形容詞があったのです。そのうちの42%、99例が「いい」とか「よい」で、17%が「ない」。「ない」というのは形容詞というふうに認識されている。それから、6%が「すごい」で、この三つを知っていると、なんと65%の形容詞が今できてしまうのです。私たち日本語教師は初級の授業に、「高い」「安い」「大きい」「小さい」「おいしい」「まずい」といった形容詞を一生懸命教えるのですけれども、本当はそういう言葉は使われなくて、「おいしい」はあるのですけれども、「まずい」というのは、「そうするとまずい」という感じです。あるいは「いい」はあるけれど、「悪い」が使われているのはたった1例で、それもいわゆる「悪い」ではなくて、「誰々さんに悪いから」というような「悪い」です。ということで、形容詞ひとつ見ても、日本人の成人は65%をたった三つの言葉だけで使いこなしている。そうすると、日本人が日本語の使い手としての自分を少し客観的に見てみると、自分がやっていないのに、子どもには豊かな言葉、正しく美しい日本語とか、外国人には正しく美しい言葉を話してほしいというけれども、その前に私も含めて、もうちょっと言葉を使えるようにしたほうがいいのではないかなという気がしました。そこから何が言えるのかというと、日本語教師としては本当に使える、必要な言葉を教えているのか、何をもって基本語彙とするのかということです。もう一つは、文法記述とか、そういった面に対しては、こうあるべきとか、こうしたほうがいいという規範の意識ではなくて、私たちが実際どういうふうに使っているかという記述的な研究がもっと必要なのかなというようなことを思いました。以上です。

司会 ありがとうございます。今は日本語教育の観点からコメントをしていただきました。次は、国立国語研究所の根幹をなす「言語生活」という言葉がありますがその言語生活という観点から、今回のお話に対してコメントをしてもらいたいと思います。杉戸所長、よろしくお願いします。

杉戸 今司会者から「言語生活」という、今日の中では出てこなかった四つの漢字の言葉がありました。お配りしたパンフレットの中に出っていますが、これをご覧くださいますと、研究所ができて 57 年目を迎えておりますが、一貫して研究所の仕事の中核に据えてきた研究姿勢と言いましょくか、言葉への目線です。言葉をどういふ角度から見つめるかという、硬い言葉でいえば研究の方法論、言葉への姿勢を表す言葉です。言葉そのものではなくて、言葉が実際の生活の中でどう使われているのか。それを追いかける。今日のこのフォーラムで扱われるテーマ、「伝え合ひ」「伝え合ふ」、あるいは「コミュニケーション」。これも言葉そのものの話ではなくて、実際に暮らしの中で言葉が生きて、使われているか、そんなテーマだと私なりに思って、3 人の方のお話をつなぐ、1 本の筋を通す言葉は一体どんなものがあるのかと、それを探すような気持ちで聞いておりました。それをコメントとして申し上げたいと思います。日ごろ、言葉の研究、あるいは言葉の教育などを考える仕事、調査をしたりあるいはデータを扱っているわけですけども、そういう仕事はついつい具体的な言葉のかたち、あるいは意味、その細かな違いとか変化といったものに目を奪われてしまいがちなのだなと、今日改めて我がことながら反省しました。たとえば、今お示ししたパンフレットの 10 ページ、11 ページに研究所で進めている仕事が二つ紹介してあります。左側の 10 ページをご覧くださいますと、日本全国で「ありがとう」という意味の方言形式がどんなふう分布しているのかの図があります。右側の 11 ページには人名とか地名、戸籍とか住民基本台帳に使われる漢字のデータを整えるという仕事もしているという紹介がございます。それぞれ言葉のかたちや文字をきちっと押さえるという仕事で、これは欠かせない大切な仕事だと思うわけです。そして、今後ともそういう仕事は続けていこうと研究所としては思うわけですけども、しかし、そんなときにも基本的なこと、言葉や文字は伝え合ふためのものである、コミュニケーションのためのものであるということを忘れずにいたいと改めて思っで聞いていました。3 人のお話は、そういう言葉を考える上での最も基本的なことから、それぞれの具体的な例をもって、たくさん考えるための手掛かりを与えてくれたものだと思います。それぞれ共通していたのは、具体例を引かれるときに、言葉がうまく伝わっていない例、あるいは伝え合えていないのではないかというふうに解釈される例を取り上げていらっしやったと思います。言葉が伝わっていないという思い。これは私も時々思うのですけれど、皆様方も同じかだと思います。たとえば、細かなことに入りますが、先ほどご覧いただいたパンフレットの 10 ページの方言の地図、「ありがとう」の

中に、私が二つ経験を思い出す例が載っています。一つは、岐阜県に方言の調査に行ったときに、インタビューして時間をとらせるわけですから、お礼を差し上げます。ボールペン1本なのですけれども、差し上げます。そうしたら、「気の毒に」と言ってくださったのです。私はまだ若かったので、そういうものがお礼の言葉だと認知できずに、こんなお礼しか準備できないんだ、相当苦しい事情でやっているのだろうなと気の毒がってくれたのかと、私は名古屋の出身で、すぐお隣の県であるにもかかわらず、誤解しました。その地図で「気の毒」と探していただくと、岐阜から北陸のほうに広がっております。それから、もう一つは、「ごちそうさま」というお礼の言葉を言われたことがあります。それは新潟県から山形県に入る境目あたりの日本海側でしたけれども、そこでもやはり言葉のインタビューをしたときにお礼を差し上げた。やはりボールペンでしたが、「ごちそうさま」と言われたのです。食べ物を差し上げたわけでもないのに「ごちそうさま」です。ささいな例ですけれども、伝わっていない。少なくともこちらにはそのときは私の知識不足で伝わらなかったのです。伝わっていないとか、あるいは理解がずれていると感じたとき、これが今日の3人のお話の中で繰り返しいろいろな例で示されたわけですが、そんなときに必要なことは何だろうと私なりに考えていく。先ほど来のご質問に、具体的に答えるようにという御質問があつて、しかし、ここから先もやはり心構えの方向でコメントを出すことになり、恐縮なのですが、心構えの問題として二つございます。一つは、伝わっていないんじゃないか、あるいは、分からないなと思ったときにも、「たじろがない」。「うろたえない」。そして、「一歩立ち止まること」です。ひょっとしたら理解できていないかもしれない。伝わっていないかもしれない。一歩立ち止まること。そういう姿勢を持ちたいものです。なぜだろうと立ち止まる。そういう気持ちです。これを姿勢と言いたいのですけれども、姿勢を持つべきだということを思います。それから、もう一つは、「あきらめない」。「くじけない」。そういう心構えを持ち続けたい。理解しよう。最初は理解していなかったけれども、なにか分かろう。あるいは、伝えそになったかもしれない。しかし、伝えたいことがある。伝えようとする。これをあきらめない。持続力ということを考えます。不思議なことですけれども、あるいは残念なことですけれども、言葉はそのまま何も工夫も努力もしないでは、伝わらなかったり、間違つて伝わったりする。これは避けられないものだ。これまたちょっと不思議なのですけれども、国語学者で、言葉は伝わらないということを前提にして文法理論を展開した時枝誠記という人がいます。あるいは言葉の専門雑誌で「言葉は伝わるか」

という特集も。そういう特集をすると、雑誌はよく売れるそうです。やはりこれは言葉の持つ負の側面です。そういうところをうまくとらえたものだと思うのですが、残念ながら言葉というのはそういう危ういところを持っているということは、たえず身構えなければいけない。その身構えが先ほど申した二つの心構えです。繰り返しますけれども、今日の3人のお話は、私にはそのような身構えを思い起こさせてくれたと思います。ちょっとこのパネルをご覧くださいながら、繰り返しますけれども、ひょっとしたら理解できていないかもしれない。あるいは伝わっていないかもしれない。そういう思いに一步立ち止まること。これを自らに課したいと少なくとも私は思います。別の言い方をすると、たじろがない、おたおたしないということです。そして、なぜだろうと考える。そこに3人の方のお話のキーワードが出てきます。想像力。これは熊谷さんのお話にありました。それから、コミュニティーの違い、多様性に目を向ける。これは柳町さんです。あるいは伝え方の多様性。これも言葉だけではないというお話も含めて、熊谷さんでした。これが一つです。それから、岡本さん、フレームの違いに思いをいたすことということが出てきました。これなどもそうだと思います。これが一つです。それから、二つ目ですけれども、分かろうとすること、あるいは伝えようとする。分からなかったかもしれない。伝わらなかったかもしれない。しかし、その次の、もう一步頑張ってみようということです。そのことに、言葉を選びますけれども、あきらめない。くじけない。こういう姿勢を持ちたいものだと私は思います。3人のお話の中では、先ほどの一步立ち止まるというのと重なる面がありますけれども、柔軟性。熊谷さんのお話にありました。あるいはキレずに。キレるという言葉は、言語生活にとっては非常に恐ろしい言葉だと思います。キレずに余裕を持つ。これは岡本さんの言葉です。そして、コミュニティーの一員としての努力。これは柳町さんの言葉です。そういったつながりを私としては感じながら、話を聞いておりました。ちょっと乱暴なまとめ方をすることになったかもしれませんが、3人のお話を貫いている2本の道筋として、伝え合うため、あるいはコミュニケーションを望ましいかたちで実現するために、あくまでも心構えとしてですけれども、いちばん基本的なものだと思うのです。とりわけ言葉の生活、相手や場面、あるいは日本語を話す人が、広がり、多様性を増やしつつあります。さらに今後も広がると思います。そういった時代において、たぶん必要なのはこの二つです。一步立ち止まる。そして、あきらめない。くじけない。精神訓話みたいになりますけれども、言葉を使っていく上で、言葉の暮らし、言語生活の上での必要な姿勢だ。そうい

うお話を3人の方がそれぞれにしてくださった。こんなふうに今日は聞いておりました。
以上です。

司会 たじろがないとか、あきらめないという言葉に関しては、実は7月末に東京の武蔵野市というところで第26回の「ことば」フォーラムがありまして、そこで「国際理解と言葉の教育について」というようなテーマで話し合いをしたのですが、国際理解をするためにも、実はたじろがないこととか、あきらめないこと、くじけないことが重要だということが話題に上りました。べつにそれは国とか言語が違わなくても、日本人同士でも重要なことで、一步立ち止まるという話が今ありましたが、これについては違う領域では判断留保という言葉があります。判断をいったん留保して、自分の指向性とか考え方がはたして相手に通じているかどうか、あるいは、今不愉快に思っていることが本当に不愉快なことなのかということを考えてみるということで、現象学の用語だそうです。専門的にはそれをエポケーと呼んでいるそうです。エポケーの実践というのを、実は異文化カウンセリングの世界ではときどきやっているようで、日本語教育の世界にも最近それが導入されつつあります。今日の先ほどから出てきたコメンテーター二人のお話の中にあったようなこと、たとえば、「体育館」という言葉を違う言葉で言い換えて分かりやすく言ったりとか、あるいは持続的に、たじろがないで、分かるように伝える努力をするとか、とても重要だと思うのですが、ここには訓練が必要な部分がたくさんあります。先ほど答えきれていない質問の中に、アナウンサーの話が出てきました。コミュニケーションとか対話といったときに、テレビに出ている方々、とくにアナウンサーに焦点が当てられる場合が多いわけです。最近のアナウンサーの言葉遣いについてはよく批判の対象になりますが、実は結構皆さん、研修とかで努力なさっていることを、私はアナウンサーから聞いています。実はこの会場に、たまたま私の友人の招きでアナウンサーの方がおいでになっています。しかも先ほどの質問の内容は、アナウンサーの言葉遣いの問題についてどう考えますかと我々に与えられていたのです。そこで、実際に聞いてみるのであれば、今日の方はトレーニングの場にも回っていらっしゃるであろう、アナウンス部の部長さんをやっていらっしゃる方らしいので、職場は言わないほうがいいですね、急な質問で申し訳ないのですけれども、たとえば、アナウンス部でトレーニングするときに、今日の話も含めてですけれども、どのような訓練をなさっているかということをお話し願えればありがたいのですが。よろしくお願いします。

参加者2 最近、アナウンサーの言葉遣いが非常によくない、悪い見本だと言われるのは

大変耳が痛いですがけれども、私たちアナウンサーの言葉遣いの考え方としては、言葉はどんどん変わっていますね。どっちが正しいか分からなくなってしまう言葉がよくあります。たとえば、最近ですと「アルコール依存症」という言葉があるのですがけれども、私たちはあれは「イソソ」が正しくて、「イゾソ」はまちがいだと教わってきました。この会場にいらっしゃる方でも、「アルコールイゾソショウ」とお使いになる方はいらっしゃいますか。「イゾソショウ」とお使いになりますよね。「イソソショウ」とお使いになる方はいらっしゃいますか。失礼しました。という具合に、正しい言葉が本当に正しいのかどうか、言葉が変遷していったって、分かりにくくなっているのです。あるインタビューを聞いたときに、インタビューをしているアナウンサーが「アルコールイソソショウ」と言って、お答えになっているお医者さまがずっと「イゾソショウ」とおっしゃっているのです。そうしますと、あのアナウンサーは言葉を知らないというふう聞こえてしまう場合があります。たとえば、国立国語研究所の研究などで、こちらのほうを9割の方が使うと。9割ではちょっと少ないかもしれませんがね。あるご年配の方がこれは間違っているというふうにお考えになるかもしれないので。私たちはずっと、こちらが正しいと言われていた言葉が、9割の方が使われなくなっていて、「イゾソショウ」が正しいと思うようになったときには、正しいと思う言葉のほうを使おうというスタンスで気をつけています。やはりだんだん言葉の研修の期間も少なくなってきましたので、何か気がついた言葉があるときは、今はメールなどがありますので、アナウンス部の中でもメールで言葉の間違いとか、地名の見間違いを送ったり、大きく紙に書いてスタジオに張ったりとか、いろいろな工夫をしている。本当に言葉は何が正しいかということも、今の言葉だけでも大変難しいなと思いつつ、従来正しいとされていた言葉を使おうというようなスタンスでやっていくようにしております。お答えになっているかどうか分かりませんが、ほかにそういう点で気がついた言葉ですと、「舌鼓(シタツツミ)」というのは舌で鼓を打つ。おいしいときに使いますね。先ほど広告の話がありましたが、コマーシャルでも「シタツツミ」を使ってしまったりしていて、「間違ってますよね」と後輩に言われて広辞苑を引くと、「シタツツミともいう」と書いてあるのですね。そのぐらい、本当に気をつけようと思っておりますけれども、言葉は何が正しいかということを決めていくのは非常に難しい。長くなって大変申し訳ありません。お答えになりましたでしょうか。

司会 ありがとうございます。所長から、お願いします。

杉戸 また別の立場の主張として、NHKの放送用語委員会に関係している立場から、NHKも含めてですが、いろいろな放送局はそれぞれの言葉の基準を独自に立てて放送にあたっているとお聞きします。NHKのことで申しますとNHKの言葉のハンドブックというものを毎年のように改訂して、そこにとくにアナウンサーの人たち、最近ではアナウンサー以外のレポーターという方たちも画面に出ますけれども、その人たちの使う言葉のいわば目安を示す。そのときの基本は何だろうかと常に気になりまして、話題にしたことがあります。その基本理念は「世の中の言葉の半歩後ろを守り続ける」だそうです。今の「イソンショウ」「イゾンショウ」なども、おそらくそういう対象になるだろうと思いますけれども、これは100%新しいかたちが定着してしまってからでは間違っているといわれる。そこを恐れる。しかし、まだ半数くらいの人しか使わない新しい言葉を使うのも、これまた、はばかる。そういう立場でいくんだ。そういう話を聞いたことがあります。その用語委員会での議論も、たえずその線をどこで引くか、それをたえず気にしながら議論が進んでいるようであります。

司会 いまアナウンス部の部長さんから、日ごろアナウンス部として考えていること、それから、所長からNHKの研修のことも含めて、委員会で考えている、半歩後ろを守り続けたいという話がありました。それでも一歩先とか半歩先を見つめながら、たとえば、留学生は、日本で生活をしたり、ある未知の人と遭遇して初めてお話をし、明日また会話をしなくてはいけない、どうしようかということで悩んでいる方が身近にいらっしゃったりする場合があります。もう時間もほぼ終わり間近になってきて、本来ならば皆さんで協議ができればいいのですけれども、そういう時間はもうとれそうに無くなってしまいました。私の不徳のいたすところであります。最後にここに並んでいらっしゃる皆さんに、2分ずつぐらいで、出会いとしてのコミュニケーションの場で、どのようなことに自分なりに気をつけているか、あるいはどういう訓練が今後必要になっていくとか、自分自身こんなことに気をつけているとか、を含めて、まとめとしてのお話をしていただければと思います。実は質問の中にこういうのがあったのです。国語の試験などでも〇×式の問題が多いということで、言葉の力が弱まっているのではないかという危機感を持っていらっしゃる方から、「ディベートとかディスカッション教育をもうちょっとしっかりやったらいいのではないか」という質問があります。留学生センターではそういう授業はあるかと思ひますし、あるいは実際にそういう授業をやった経験のある方もこの中にいらっしゃると思うので、その経験から得られた知見等も含めて、

何かお役に立つようなことがあれば一緒に話していただければと思います。熊谷さんから順番をお願いします。

熊谷 最後にコメントのまとめとしてありましたように、何かうまく通じなかったときに、一歩立ち止まって、そして、くじけずに、あきらめずに頑張るというようなことが出ました。私自身も柔軟性とか、そういうことについて申し上げたのですが、一つ、やはりここで問題になるのは、一歩立ち止まって、あきらめずに何をどうしたらいいかということだろうと思います。そのことへの答えと言いますか、提言としては、小林さんがおっしゃった「引き出しを増やす」こと。たとえば、「体育館」という言葉が通じなかったときに、では、どうやってみよう、これでだめだったら、こうしよう、ああしてみようというレパートリーと言いますか、引き出しを増やしていくことはやはり大事だと思うのです。気持ちとしてなんとかうまく通じさせたい、なんとかしたいと思っても、その引き出しのところにネタが入っていないと、ない袖は振れないというか、どうしていいか分からないということになってしまいます。では、引き出しを増やすためにどうしたらいいかということですが、いろいろなやり方を自分で考え出すということもあり得ますが、一人の人間の頭の中から出てくることは限りがあります。考えてみると、毎日の生活というのはそういったコミュニケーションの具体例の宝庫です。周りでいろいろな人間がいろいろなことを言っている中で私たちは暮らしています。周りを見て、ああ、この人はこういう言い方をするんだとか、こういうふうに言うと、なるほど、こんな反応が出てくるんだな、などと思ったり。私自身はそういうことに興味を持って研究をしているので、人が話しているのを聞いたり、見たりしていることが大好きなのですが、それだけでなく、岡目八目と言いますか、自分自身がかかわっているコミュニケーションだけではなくて、ほかの人が話しているのを横で聞いていて、ああ、この人はこう言っているけれど、こっちの人には通じていないみたいだなとか、こんな言い方をしてみたらいいのにとか、いろいろ考えてみるということも一つあるかと思うのです。そういうふうをしていると、退屈な会議でも少し面白くなったりというようなこともございます。結局、周りにいる人たちが実際に実践しているコミュニケーションを見て、それを自分の引き出しの中に取り込んでいくということ。それはネタを増やしていくことだけではなくて、実際に自分が伝える側、受け取る側になったときに、今のって何なんだろうと考える観察力、想像力を訓練していくことにも、もしかするとつながるのかもしれないと思ったりしております。

柳町 先ほどの小林ミナさんのグラフの中に、タテ軸が何なのかというお話があったのですけれども、コミュニケーション能力かどうか、あるいはコミュニケーション能力は何かということをやっと考えたいのですが、たとえば、方言学の学者で、コミュニケーションする能力というのはどういうものかということをや25年前に定義した人がいます。有名な論文ですけれども、では、その時点で分かったかということ、やはりコミュニケーションする能力というのはすごくとらえ難いというか、難しいもののように思っています。たとえば、世の中には測定になじむものとなじまないものがあるのではないかと思います。たとえば、ここに今机がありますけれども、この机の長さは何センチとか、重さは何キロぐらいとか、そういう物理量は、たとえば、哲学者とか数学者の間に論争はあるかもしれませんが、それを測定するというの是一般の人にとってはそれほど違和感はない。けれども、コミュニケーションの能力を測定するということを我々が考えたときに、それは非常に難しいのではないかと思います。コミュニケーションの能力は何かということですが、とてもこれは語り尽くせないと思います。留学生センターの行事の一つの宣伝ですけれども、11月6日の土曜日に日本語教育学会の研究集会がありまして、そこで愛知教育大学の義永先生という方がいらして、「コミュニケーション能力とは」というお話をされます。それは学会の研究集会ですけれども、どなたでも入場無料で、事前に申し込みも要りませんので、ぜひ興味のある方はいらしてほしいのですが、11月の第1土曜の午後です。いずれにしてもコミュニケーション能力とは何かというのは、非常にとらえ難いものなのではないでしょうか。我々は教室の中で、日本語教師として学生の能力を数値化したりしていますけれども、それはあくまで仮の措置というか、必ずしもそれがコミュニケーションの実態とか、妥当な測定方法なのかどうかというのは、我々は常に批判的に見ていかないといけないのではないかと。ですから、いい日本語教師であるということは、同時に、今自分がしている実践をやっと批判的に、それでいいのかというふうに見るといことなのだろうと。先ほど記述というお話が出ましたが、実際に人がどうやってコミュニケーションしているか、どうやって伝え合っているのかというのを、もう一度よく考え、よく見てみる。今までだと母語話者としての内省をもとにシラバスを作ったり、教えたりということをしていましたけれども、実際の言語の使われ方をよく見て、常にそれを改訂していくとか、見直していくという作業がこれから必要なのではないかと。ずっと日本語教育の視点の話ばかりになってしまったのですが、そういうことを考えました。

岡本 どのような実践かということ踏まえながら、もしできればということでしたので、もう一つ、実験で考えたことですが、先ほどの掲示板でもう一つ。今回、前期にちょうど反日デモが起きましたので、国際関係学部ですから、また掲示板で反日デモについて日本人の学生と留学生でやりとりをしました。そのときどういうことになったかと言いますと、最初はやはりかなりシビアな意見が多かったのです。けれども、お互いにそれぞれの教科書はどうなっているのか、どんな教育を受けているのかということを知っているのかという話になってきて、それをお互いに掲示板で報告し合ってみると、それによって全然お互いに知らなかったんだということに気づき始めるのです。そして、知らなかったんだから、どちらがよかったんだとか、知らないからしょうがないというのではなくて、では、両方でどういう報道をすれば、この反日デモが解決されたり、いい方向に進むのかというようなことを考えたほうがいいのか。それから、両方の国に住んでいる人がいるわけですが、そこではお互いにコミュニケーションや人間関係をつくっている、そういうところもメディアで流したらどうなんだというようなことなども出てきたのです。競争でそういうものをつくったらどうかということもありました。ですから、ここで考えられることは、まずはお互いに交流をして相手を知ることではないかと思うのです。そして、それによって何かを一緒につくってみる。一緒にやってみるということではないかと思います。コミュニケーションという言葉は英語の大きな辞書で調べてみると、「伝える」と一方方向に思いがちですが、むしろ「伝え合う」という言葉にぴったりで、いちばん上に出てきていたのは「to share with」という言葉だったのです。つまり、何かを分かち合うということ。それから、もともとのラテン語の意味というのは、共通のものをつくり出すという意味だそうです。そのことを考えてみると、今柳町さんがおっしゃいましたけれども、コミュニケーション能力というのはとらえきれない、社会文化にもかかわる、ですから一緒に何かをつくりながらやっていくということが大事なのではないかと思います。その際、正しいとか、美しいというもの、誰にとって正しいのか、一体誰にとって気持ちいいのかということと一緒に考えながら決めていく必要があるのではないかと思いますし、自分にもそういう心のゆとりを課したいなと思っています。ヤマアラシの知恵というのを聞いたことがあります。針を持っているので、お互いに夫婦が寒いときに体を温め合いたいものだけれども、近づきすぎるとその針で傷つけてしまう。けれども、遠くなりすぎれば寒い。ですから、共同生活するためには傷つけずに寒くない互いの距離というのを一生懸命考えるというのを

読んだことがあるのを思い出したのです。そういうことも一つのコミュニケーション能力を鍛えていく視点ではないかと思います。

小林 私は日本語教育の中でも文法教育とか文法研究が専門なので、その観点から一言申し上げたいと思います。文法を研究するときに、正しい文とか、いい文だけを見ていても、なかなかどういうルールか分からなくて、間違っている文とか、ちょっとおかしい文でルールを考えることがあります。たとえば、「教室を出る」と「教室から出る」はどう違いますか。その二つであればそんなに違わないのですけれども、「大学を出る」「大学から出る」と考えると、単に敷地の外に出る場合は「から」だけれども、卒業するとか、コースを修了するといった抽象的な意味の場合は「を」は大丈夫で、「から」はだめだとか。だめなものを見ることによって、逆にルールが見えてくる。今回のケースも、コミュニケーションがうまくいっているケース、誤解がないようなケースだけを見ていてもなかなか分からなくて、失敗したケースとか、だめだったケースを見ることによって、反面教師とか、逆に私たちがどういうものを求めているかが分かるのではないかと思うのです。先ほどどなたかの質問にあった、違いを楽しむというけれど、なかなか楽しめない。それは私もそうで、自分が当事者になって失敗したコミュニケーションは振り返るのもいやだし、相手のことを思い出すのもいやだし、忘れてしまいたい。先ほどの熊谷さんの訓練という部分ですけれども、であれば、訓練というふうに考えると、自分とはとりあえず関係のないケース、事例みたいなものを見て、それについて意見を交換するとか、テレビドラマでも何でもいいと思うのですけれども、自分が当事者ではない、失敗したコミュニケーションというものを誰かと語り合うなり、自分からそれを見ることによって、自分のコミュニケーションのパターンとか、自分が誤解を招きやすい振る舞いとか、そういうことを割と冷静に見られるのではないかという気がしました。留学生の会話の授業などでもよくやるのですが、自分たちがやって失敗した会話を見せるのもいいのだけれども、なかなかそういうものを好まない学生もいるので、ちょっとつくってしまった不自然な会話みたいなものを見せて、なぜこれがだめなのか。自分が当事者ではないので、割と客観的にというのだけれど、やってみたら、自分も同じことをしてしまったりするのですが、ちょっと引いた視点で見るということが、実践に持ち込むには、割と楽にできるケースなのではないかと思いました。以上です。

杉戸 二つのことを申し上げます。一つは、小林さん、あるいは柳町さんから出ていました、規範を直接扱う前に、記述の研究が不可欠だというお話がありました。これは言

言葉を和らげて言いかえると、記述ということは「言葉を見つめる」ということだと思います。普段の生活の中で言葉を見つめることを、ぜひやり続けたい。やり続けることに意義があると私は思います。言葉を見つめる。これは先ほど熊谷さんが、周りで誰がどんな話し方をしたか、ここはこうしたらいいんじゃないかという、そういう部分も含めつつ、とにかく周りの人の言葉遣いを見つめるということでもありますし、私ども国立国語研究所の仕事は、日本語による言語生活を見つめるところから始まると思っています。そういう意味で、行われているコミュニケーション、伝え合いの姿をまずは見つめるということです。実は、なぜおまえは国研で仕事をするようになったのかという質問もいただいているのですけれども、私は言葉を見つめるのが好きなのです。人がしゃべっているのを見ているのが好きなんだというのは、子供のころの思い出として確かに覚えがあります。そういうものが今の仕事につながっているのだろうと思うのです。それはともあれ、言葉を見つめる、記述的な立場で言語生活を見つめる。それを一つ申し上げたい。もう一つは、硬い言葉になりますが、私は敬語を専門の領域にしています。敬語を使い分けるときに、必ず相手と自分の関係、あるいはその場その場はどういう場面であるのか、改まった場なのか、普段の場なのか、そういう場面を考えに入れるということが言われます。これを硬い言葉で言うと「外界認知」です。身の回りのこの世界、今のこの場をどう認知するか。それが敬語の言葉選びの出発点になる。そういう考え方をするわけですが、先ほど熊谷さんの、レパートリーを増やす、引き出しの中を豊かにするという。これは言葉の段階の話です。言葉の種類、発音とか、言葉の形式、単語の種類が問題になる段階です。外界認知というのは、その一歩手前の段階と言っていい身構えを整える段階です。今自分はどういう立場で、相手はどういう関係の人と話をしようとしているのか。そのとらえ方に幅を、あるいは種類を身につけることが必要だと思うのです。一つ、この人とはこういう人間関係でしか話せないのだというとらえ方ではなくて、いろいろなとらえ方がある。逆に、相手は自分のことをどういふうにとらえているのだろうか。こういうとらえ方もあるけれども、こういうとらえ方もしてくれているかもしれないといったような、場面とか、相手の人間関係のとらえ方、そこに多様性を探す。外界を認知することの幅を広げる。その能力を広げるということが必要だと思っています。一つは「言葉を見つめる」こと、二つには「外界認知」周囲をどうとらえて言葉を用意するかということ、この二つを今日は強調したいと考えました。以上です。

<終了>